

京都大学	博士(文学)	氏名	神 作 研 一
論文題目	近世和歌史の研究		

(論文内容の要旨)

本論文は、元禄前後に上方で活躍した地下歌人^{じげ}を扱った論考を軸として(第一部)、彼らが地方歌壇に齎したものを追究し(第二部)、その後の門流の展開を整理する(第三部)とところまでがひとつづき、元号で言えば元禄から寛政あたりまでを射程に収める。以下、上方地下^{かみがたじげ}の一流である京都香川家から出た香川景樹に関する諸論と、景樹と同時代の江戸の武家歌人松平定信についての論考を置き(第四部)、近世和歌史の流れが見渡せるようにと配慮する。これに、いわゆる歌書の刊本を網羅的に調査検討した二編を添えて「附編」とするものである。

さて、第一部「元禄京都歌人考」では、元禄(一六八八—一七〇四)前後に京都で活躍した地下歌人たちを取り上げて、その活動のさまを跡付ける。門人への面々口授を旨とする望月長孝・平間長雅^{ちようこう ちようが}系の一流(日下幸男『近世古今伝授史の研究 地下篇』新典社、一九九八)とは異なる香川宣阿^{せん な}や恵藤一雄^{えとうかずお}のほか、歌俳双方に亘った金勝慶安^{こんせ}、さらには〈江戸堂上派〉の緒を開いた松井幸隆^{ゆきたか}の動向を描出するとともに、彼ら上方地下にとってすこぶる重要な仕事であった地方門人に対する添削の様態を分析して、その詠歌作法の析出に踏み込む。むろんそれは、あくまでも指導の際に垣間見られた「作法」なのであって、そこからただちに誰その「和歌観」ないし「歌論」に肉薄するには、まだいくつかの困難が存するが、従来「穏やかな二条派風」と十把一絡げにされるばかりであった彼らの、その指導の現場に参入することには大きな意義が存するであろう。

第一章「初代梅月堂香川宣阿のこと」は、京都香川家初代香川宣阿(一六四七—一七三五)の伝記研究。上京後の儒者(号、隣善)としての足跡を洗い出し、時宗の文学史と密接に関わって種々の伝授を集約したことを確認、さらに堂上諸家への就学の実態をうかがった上で、父祖顕彰や歌書刊行の事実にも言及する。

第二章「元禄の添削」は、岐阜県富加町^{とみかちょう}の平井家に伝襲する、添削の施された和歌詠草(現富加町郷土資料館蔵)に関する研究。点者は、香川宣阿・水田長隣^{ちようりん}・金勝慶安ほか、いずれも元禄期に活躍した上方の地下二条派歌人たちで、伝襲の六十二点のうち、特に同題の詠草を異なる点者が添削したその様態を分析して、彼らの詠歌作法の特徴を解明する。

第三章「点者としての水田長隣」は、やはり富加町郷土資料館に所蔵される水田長隣(?—一七二三)の加点詠草全二十三点(正徳—享保年間)を検討対象として、長

隣添削の現場に踏み込み、その詠歌作法を追究するもの。評語（批語と褒詞）ごとに長隣の意識を探り、点者としての指導の内実に迫る。

第四章「金勝慶安の軼事」は、歌俳兼学の人金勝慶安（一六四八—一七二九）研究。俳事以外の知られざる活動の実態を、和歌・歌学を軸として神道学・天文学をも含めて紹介するとともに、新出の慶安加点詠草（富加町郷土資料館蔵）四点を読解し、点者としての在り方をも炙り出す。

第五章「『難三長和歌』をめぐって」は、和歌批評の書『難三長和歌』（祐徳稲荷神社寄託中川文庫蔵・写一冊）を精読して、元禄前後の上方地下の和歌のありようを探ったもの。先ず、従来不分明であった著者を恵藤一雄（一六四八—一七〇四）と特定し、その執筆目的や撰歌資料、成立時期を考察した上で、批評の方法と性格とを明らかにする。

第六章「松井幸隆^{ゆきたか}の歌学一斑^{ろくそうおう}」は、武家歌人松井幸隆（一六四三—一七一七以降）の蔵書目録『六窓翁蔵書目録』（無窮会図書館蔵・写一冊）をめぐり研究。幸隆は、晩年（正徳年間）に江戸へ下って〈江戸堂上派〉の基を築いた重要な人物だが、その日々の学問の状況を「蔵書」という観点から考察し、歌学の基層を確かめる。

第二部「地方歌壇の展開」では、上方地下が地方歌壇に齎したものを追究する。取り上げる地域は伊勢（第一—三章）、尾張（第四章）、備前岡山（第五—六章）、美濃（第七章）の四か所。伊勢は平間長雅との、尾張と岡山は香川宣阿との、美濃は水田長隣・松浦寛舟^{まつら かんしゅう}とのそれぞれ深い関係が確認され、堂上に連なる上方地下の求心力の大きさが改めて浮き彫りになった。〈地方と中央〉という構図自体は全く新しいものではないが、〈都のちから〉はやはり相当に強かったと見るべきである。他方、学ぶ側の精神性を引き出すことにも留意し、それぞれの地の和歌史、学芸史、あるいは和歌以外の他ジャンル^{のぶよし なおふさ}の動向にも注意を払う。中西信慶や野村尚房などといった各地の有力歌人については、個別に章を設けて言及する。

第一章「元禄前後の伊勢歌壇」は、元禄期前後の伊勢神宮神官の歌壇史研究。撰集・家集・定数歌など関連資料の網羅的調査を踏まえて、特に外宮神官^{げくう}による月次歌会の隆盛に注目する。具体的には、上方地下平間長雅との密接な関係や、当代伊勢俳壇との浅からぬ関係性などを新たに指摘し、さらに彼らの和歌表現についての考察を試みる。

第二章「中西信慶の歌事」は、江戸前期の伊勢の神宮歌人中西信慶（一六三〇—一九九）の自筆家集『愚詠草稿』（神宮文庫蔵・写三冊）をめぐり基礎的研究。書誌、伝来、構成、成立、そして交遊の実態を探り、なお歌風的一端を伺う。俳人の才麿（一六五六一—一七三八）や和学者契沖（一六四〇—一七〇一）との歌交の事実にも言及する。

第三章「久志本常彰^{くじもとつねあきら}の歌事」は、伊勢外宮の神官久志本常彰（一六七五—一七五二）に関する研究。二種伝わる家集（『常彰詠草』と『花鶯吟余』）の伝本を整理し、歌歴

を年譜形式で示した上で、特に師松井幸隆加点の「神祇百首」（神宮文庫蔵『花鶯吟余』第二類本所載）を取り上げて、常彰和歌の表現についても具体的な検討を加える。

第四章「元禄一享保期の熱田歌壇」は、元禄一享保期における尾張熱田歌壇の種々相を、香川宣阿との関係に留意しつつ考察したもの。熱田神宮所蔵の関係歌書を洗い出し、特に享保期の三つの奉納和歌（『享保七年奉納二十首和歌』『享保八年奉納御遷宮慶祝百首和歌』『奉納和歌三十首』）に着目する。

第五章「一枝軒野村尚房の伝と文事」は、香川宣阿の高弟であり、武家（備中鴨方藩士）歌人である野村尚房（？一七二九）の伝記ならびに文事に関する総合的研究。湯浅常山との縁戚関係が確認されるほか、当代岡山雅文壇の中心人物として歌書の書写と出版に積極的に携わったこと、江戸藩邸における和歌活動の重要性などを指摘する。

第六章「楽軒岡俊直とその周辺」は、江戸中期、特に宝永から享保期にかけての岡山学芸史研究。岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『岡山神社日記』写本六十冊余を読解して、神官岡俊直（一六七八一—一七三九）を中心とする多彩な文芸活動（和歌・連歌俳諧・漢詩・謡ほか）の実態を、京都との関係を踏まえて跡付けた。

第七章「文之字屋美濃平井家の文芸活動」は、東濃加治田の豪商平井家の歴代当主たちによる文芸愛好の種々相を描出したもの。特に、歌俳両面で顕著な足跡を残した第九代冬秀（一七二七—一八三）に注目し、在京の和歌の師の特定や、詩箋の伝存、あるいは歳旦帖の集積などの事実についても紹介する。

第三部「上方地下の系譜」では、元禄上方地下のその後の門流の展開を整理するとともに、新たに日野資枝門の地下歌人石塚寂翁を取り上げて、寛政一文化期の京都歌壇解明への一試探とする。第一・第二部と比較して、いまだ資料整理に留まる論考が多いけれども、元禄頃に確立し始めた地下重代の〈歌の家〉がどのような変遷を辿ったのか、またそこにはどのような和歌史的・歌壇史的状况が出来していたのかを明らかにするための礎となるべき考証である。それはとりもなおさず、地下の歌道家（香川家）に入ることでその後顕著な活躍を見せた香川景樹を射程に収めての研究でもあった。

第一章「『聯璧集』一梅月堂門と長雅門と一」は、元禄上方地下の二つの流派（香川宣阿門と平間長雅門）の門人研究。宝永七年（一七一〇）における宣阿・長雅両門の試筆及び歳暮和歌を収載した新出の写本『連璧集』（神作研一蔵・写一冊）を紹介し、両流の特色を引き出そうとするものである。

第二章「梅月堂門のゆくえ」は、宝暦九年に催された香川宣阿の二十五回忌追善和歌資料（刈谷市中央図書館村上文庫蔵『切紙二十五箇条』坤巻）の考察を通して、宣阿没後の香川家の動向と門流の展開を探ったもの。宝暦前後の京都歌壇の一面を知るに足る好資料でもある。

第三章「石塚寂翁の家集について」は、大阪市立大学学術情報総合センター森文庫に所蔵される、新出の『〔石塚寂翁家集〕』（自筆二冊）の紹介と分析。石塚寂翁（一七四六以前—一八一六以降）は、^{げんこうあん}幻交庵と号した上方の地下二条派歌人で、日野資枝門。書中に豊富な歌会注記を精査して寂翁の交遊圏を探り、またいくつかの伝記的事実を明らかにする。

第四部「化政期／上方と江戸と」では、上方地下の一流である京都香川家から出た香川景樹に関する論考（三本）と、景樹と同時代の江戸の武家歌人松平定信についての論考を収める。景樹研究はこれまでも相当の蓄積があるが、家集の全注釈としてなく、最も進んでいると言われる歌論研究に関しても未開拓の領域は多い。ついては、まず和歌の表現研究を目指して和歌一首の精読を試みるとともに、歌論について、その優れた〈実景論〉に着目して内実を考察する。また、ややもすると忘れられがちであった「歌論書」そのものに対する研究として、『東塢亭話』なる未紹介の一書を取り上げて検討を加える。他方、松平定信和歌の表現研究は、『賢歌愚評』を材として進める。

第一章「景樹和歌の一側面」は、香川景樹（一七六八—一八四三）の和歌の表現研究。家集『桂園一枝』（文政十三年刊）所載の一首「大井川入り江の松に降る雪は嵐の山の桜なりけり」（一一六番歌、題「江山春興多」）をめぐって、堂上・地下双方に亘る同時代の用例を検討し、その新しさを具体的に指摘する。

第二章「〈実景論〉をめぐって」は、景樹の歌論研究。その実景重視の説を分析して、二重構造（「実際ノケシキ」につくことを希求する一種の現実主義に向かいつつも、同時に「マコトノケシキ」を具現するために主情主義に赴くというもの）を確認し、なおそれが同時代の詩論・画論（特に南画家桑山玉洲の真景論）に負っている可能性を指摘する。

第三章『東塢亭話』覚書』は、景樹の歌論書研究。久松潜一旧蔵『東塢亭話』（人間文化研究機構 国文学研究資料館現蔵・写一冊）を紹介し、その歌論書としての種々の特質を引き出す。併せて、聞書者である児山紀成（一七七七—一八四〇）の和歌活動にも言及して、江戸の地における桂門の実態を明らかにすることも志向する。

第四章「歌人としての松平定信」は、松平定信（一七五八—一八二九）和歌の表現研究。定信の和歌を清水浜臣が批評した『賢歌愚評』（文化八年成、国立国会図書館蔵・写一冊）を分析して、定信詠の特徴——玉葉・風雅の京極派風を尊重しつつも、新古今風をも具備し、なお正徹の表現への傾倒が看取できることなど——を指摘する。

附編「歌書刊本考」では、江戸時代に刊行されたいわゆる歌書（撰集や家集、定数歌、歌合、歌会和歌、歌論歌学書はもちろんのこと、適宜紀行・随筆・物語・注釈・詩書・絵本などの類をも含んで考える。但し、整版のみを対象とし、古活字版や木活

字版などは除外する)を、網羅的に調査検討する成果二編を収める。そもそも歌書の刊本は、「流布本」のひと言で片付けられ、必ずしも十全とは言い難い本文の質がまま問題にされてきたが、歌書刊本によって〈知〉の基盤整備がなされた事実はやはり見逃し難く、したがってこの領域の研究は、ひとり近世和歌研究のみならず、近世文学史万般の展開を見据える上でもその重要性は否定しがたい。

第一章「歌書の変遷 — 江戸前期を中心に —」は、江戸期に刊行されたいわゆる歌書の全容(総計で千七百点余り)を捕捉して、その展開と消長を論じたもの。特に江戸前期(寛永から元禄まで)の特徴と傾向を、A寛永期、B基本文献、C装訂、D書型という四つの観点から描き出す。

第二章「江戸の王朝美 — 歌仙絵入刊本の展開 —」は、歌仙絵を伴った歌書刊本の総合的研究。『三十六歌仙』と『百人一首』を軸に、まずはその刊行年表(全八十二点)を示し、それらの特徴と傾向を、A書型、B版元、C表紙、D絵師、E多色摺の五項目に分けて記述する。その上で、〈継承と革新〉という大きな視座のもとに歌仙絵の変遷を辿るものである。

(論文審査の結果の要旨)

江戸時代の文芸は従来、元禄の芭蕉、西鶴、近松と、文化文政期の京伝、馬琴、一
九、三馬、春水などの戯作類と、いずれも俗文芸に偏って愛好される傾向が著しかつ
た。近代文学により近く、近代の眼による評価を受けやすい俗文芸がもっぱら脚光を
あびて、それらを近世文学そのものと見る傾きすらあったと言わなければならない。

しかし、中村幸彦の雅俗論の提唱以来、漢詩文や和歌などの雅文芸を軽視した研究
では近世文学の全体が見通せないという考え方が一般化し、近世雅文芸の研究は、こ
の四半世紀の間に飛躍的に進展してきた。ことに和歌史では、明治以来、大隈言道や
橘曙覧などの個性的な歌人を除いて、堂上公家の歌人、その指導下にあった地下歌人
たちは、中世以来の二条流歌学を墨守するだけの存在としてほとんど無視されてきた
と言ってもよいが、近年は、堂上、地下の歌人たちの活動を広く調査し、それらの文
化史的意味を評価しようとする研究が相次いでいる。本論文は、その新たな動向を強
力に推し進めてきた一旗手による労作である。

近世和歌史は、もとより数人の個性的歌人の点描で済ますわけにはゆかず、堂上、
地下、さらに地方の歌壇をひろく見渡した上で記述されなければならない。本論文は、
そのような考え方の上に立ち、第一部第二章および第三章は、岐阜県富加町の平井家
に伝えられる和歌詠草を例にとり、堂上歌人の指導をうけた元禄期の上方地下の歌
人たちが、さらに地方の歌人の歌を添削指導していたことを、詳細に紹介する。堂上
から上方地下へ、地下から地方へと、二条流の歌学が、しかしそれぞれの歌人ごとに
少しずつ異なる作法によって伝えられたことを生き生きと描き出す研究であった。も
とより個々の歌人たちが特に傑出した力をもっていたわけではないが、彼らの活動が
全体として近世和歌の世界の底辺を押しあげるものだったことが論述されたのである。
そして、第二部の諸論は、地方歌壇の展開を伊勢、尾張、備前岡山、美濃の四か所
において描き出す。新たな資料を発掘しつつ進められるそれらの研究によって、近世
和歌史を、点ではなく、面として描こうとする論者の企図は、ほぼ達成されていると
言うべきであろう。

本論文のもう一つの核に、第四部の三つの章からなる香川景樹の研究がある。景樹
はすでに研究の蓄積のある対象ではあるが、論者の真面目は、景樹の和歌、歌論を具
体的に分析するのみならず、その家祖である京都の地下歌人香川宣阿にまで遡る研究
を併行させるところに見られよう。第一部第一章「初代梅月堂香川宣阿のこと」がそ
れであり、そこでは、宣阿が古義学、時宗に接触し、さらに堂上歌人に歌を学んだこ
との実態が明らかにされる。もちろん、論者はそれをただちに景樹の歌学と結びつけ
るという短絡は犯さないにしても、元禄期の地下歌人の香川宣阿と、近世と近代との
結節点にあった歌人香川景樹とを遠く近く一目に見わたすことは、近世の長い和歌史
を自在に往還できる論者にしてはじめて可能となった新たな見方であった。

このように近世和歌史を空間的、時間的にはば広く記述する本論文は、従来の研究

の欠を補うものとして高く評価されなければならないが、なお嫌りない点がないわけではない。第一に、地下歌人の研究が詳細になされている一方で、堂上歌人についての言及、堂上歌人が地下歌人の歌作を添削した例についての考察が乏しいことである。堂上から地下へ、地下から地方へという和歌教育の展開を明らかにするためには、本幹たる堂上歌壇の研究がやはりまず最初にあるべきであろう。また、近世和歌史を標榜するにとしては、近世後期の歌壇についての言及が少なすぎることに、すなわち、景樹を除く国学系の歌人たちについての研究がないことも指摘されるべきであろう。もちろん、従来の近世和歌史が国学系の歌人の顕彰に傾斜しすぎていたことを正す目的で作られた本論文ではあるが、逆に偏向しては和歌史としての意味は半減するのではないか。また新資料の発掘、紹介に紙幅を費やすのに比して、和歌作品そのものの詳細な分析が不足しがちであるという印象も否めない。

しかし、もとより近世和歌史の全体が一個人の研究で覆い尽くせるはずはない。従来、等閑視されてきた上方地下歌壇に着目し、地下から地方へという添削指導の現場に参入し、それらの意味を初めて文学史の上に定位した本論文が、今後の和歌史研究の向かうべき方向を確かに示すものと高く評価されるべきことは言うまでもない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十二年九月二十二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。